
女 ~ It's Like A Pot of Gold At The End of The Rainbow ~

黒神王輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

曇天の少年、斜陽の少女
It's Like A Pot
of Gold At The End of The Rain
bow

【Nコード】

N0103T

【作者名】

黒神王輝

【あらすじ】

太陽は全てを元気付け、雲はそっとして欲しい時に太陽を抑え、雨は全ての悲しみを流してくれる。
そんな優しい世界なんて、在りはしない。
在るのはただ——辛い現実だけ。

身を挺して、俺——星名蒼は車に轢かれそうだった少女を庇った。

皆は立派だと、褒め称えてくる。

けれども、掛け替えの無い剣道生命を失った。無関係な少女と引き換えに、だ。

もう一度、剣道がしたい。でも、もう無理だ。

好きだから続けられるとか、馬鹿なヤツの妄言に過ぎない。

It's Like A Pot of Gold At The
End of The Rainbow

「それはかなわぬ夢のようなものさ」

そう胸に言い聞かせ、新しい生活に身を投じる。

元剣道少年——蒼と、その出会いが幕を開けた。

Act 1：曇天の少年、斜陽の少女 1 / 2

刃を持つ手が震える。

少年の息遣いは荒い。とつぷりと絶望した瞳には恐怖と戸惑いが浮かんでいる。額からは脂汗が流れ落ち、下に出来た汗の水溜りから、結構な 時間そうしている事がわかる。

何をしているか。

簡単だ。

少年はとある路地裏で、ナイフを首筋に当てて自殺を図ろうとしていたのだ。

彼の名前は星名蒼。十六歳。公立穂張高校に通っている高校一年生。剣道部に所属している。

人付き合いが苦手によく敵を作っていたりしたが、喧嘩が滅法強いのでトラブルに巻き込まれる事は少なかった。部活動の方も優秀な成績を残し、新人戦で全国大会決勝で勝った事もある。

——だが、運命とは残酷に少年の夢を踏み潰す。

冒頭の一ヶ月前。彼が新人戦優勝を飾った帰り道。

「よくやったな、蒼！ 個人の部で一位だぞ！ 優勝だ、素晴らしいな！」

「そうっスね」

蒼は顧問の教師にそっけなく返す。こいつ等はこのいつとときに限ってデカイ顔をしたがる。何もしていないいくせに。

そっという面では、先輩は尊敬できる。真面目な先輩なら、特に。

良い相手でもあるし、手本でもある。指示を飛ばすだけの役立たずとは違う。

会場から学校は遠くないので、行き来は徒歩で行なっている。頻繁に通っているところでもあるので、緊張も無かった。

蒼は教師と共に先頭を歩き、残りの連中が後ろで喋りながらついてきていた。同級生はあまり蒼と接しようとしないと、交差点に差し掛かる。

目の前で信号が赤に変わられるのはなんだか腹立たしいが、怒ったところで信号の色が変わるわけも無いので待つ事にする。

だが、眼前に広がる光景を見て、反射的に体が動いていた。

まだ車道の信号は赤。車は発進してはいけませんが、大型トラックが突っ込んでくる。

蒼一人だけなら余裕で避けられた。

が、後ろには剣道部とは全く無関係の女学生が佇んでいた。高そうな機械の車椅子に座って、路上で怪我をした猫を抱きかかえるのが視界に飛び込んでくる。

トラックは承知の上だったのだろう。なぜ、自分を犠牲にしないで、猫を助ける必要があったのだ。

内心で舌を打ちながら、地面を蹴り、跳ぶ。車椅子を蹴り飛ばし、通行待ちの人々の下へ、少女と猫は吹っ飛んだ。

——束の間の満足感。押し付けがましい偽善。自己満足も良いところだ。だが、確かに口元は笑っていただろう。

刹那に、蒼の体へ凄まじい衝撃が走り、何かが砕ける音を聞きながら彼の意識は沈んでいった。

全治二ヶ月。右腕、右足の骨折。

白いベッドの上で、蒼は絶望していた。

幼い頃から剣を振るってきた。剣術師範の家系に生まれ、剣を振

るう日々。

オリンピックにも出れると太鼓判を押してくれた両親や先輩。

太鼓判はどうでも良かったが、その期待を無碍にってしまうことに悔恨を感じる。

もう、ダメだ。

右腕もだが、それよりも踏み込み足である右足の損傷は、剣道生命を大きく左右する。

——終わったのだ。蒼の剣道人生は。

そして、気付けば退院していた。後に気付くが、一ヶ月で完治してしまっている。医学界も仰天する回復速度だったらしいが、その頃の蒼はそんな事さえも頭に入らなかった。

家に帰って、それからよく覚えていない。ただ、ナイフを持つて自殺しようとしていた。これが事実だ。

しかし、どういったわけか。手が震えて上手く動かない。

——恐怖しているのか？ 既に絶望の鈍底ににいるというのに。

「……クソッ！ 動け、動けよ！！」

叫ぶが、その手は動かない。

ナイフを捨て、一回り細くなった腕を振り被り、コンクリートに叩きつける。

痛い。こんな事をしても、痛みすら感じなかった頑強な腕が失われた。それでも一般人よりは強いが、それまでだろう。

「畜生……ッ！ 何で知らねえ奴なんか……ッ！！」

蒼は人知れず嗚咽を漏らす。

何度も何度も。手の皮が破れようが、感覚がなくなるのが構わない。

ひたすらに壁を殴りつけながら、己の愚行を呪ったのだった。

Act 1：曇天の少年、斜陽の少女

翌朝。輝く斜陽に照らされ、蒼は眠りから目覚める。正直、寝足りなかったが、学校なので文句も言ってられない。

蒼はベッドから起き上がる。が、体に鋭い痛みが走り、再びベッドに倒れこんだ。

筋肉痛。こんなもの、長らく感じた事がなかった。自分の身体能力の低下に自嘲的な笑みを零し、蒼は体を極力刺激しないように改めて起き上がる。

両親が起きている時間帯ではない。朝早く起きる必要もなくなったので、鉢合わせる事も無いのだ。

制服を着込むと、部活道具の入ったエナメル製のバックに手を伸ばし――やめた。こんなもの、もう必要ない。

学生鞆を掴み、一階に降りる。トースターにパンを突っ込み、コーヒーを淹れながらニュースを見る。

初老のニュースキャスターが無機質な笑みを浮かべ、何か喋っている。でかでかと画面上に陣取っている見出しにも、殊更興味が惹かれなかったので、パンが焼けるまで待つことにした。

……もうそろそろ、焼ける頃合か。そう思った瞬間に、チン！という間抜けな音を奏で、同時に狐色に焼かれたパンが飛び出してくる。マーガリンを塗り、頬張りながら新聞を広げた。

経済は不景気だの、芸能人のスキャンダルだの、下世話で下らない見出しが、至るところで踊っている。

「……つまんねえ」

新聞を食卓に投げ、コーヒーでパンを流し込むように食べ終わると、蒼は自転車の鍵を手にとって家を出た。

車庫に鎮座する黒い自転車の鍵を開けて、荷物を後部座席に紐で括りつけ、漕ぎ出した。

景色が線のように流れていく。結構な速度だが、車どころか人も朝っぱらは通らない閑静な所なので、問題は無い。

どうにも、学校へ行く気にはならず、祖父の道場の方へ進行方向

を変えた。無遅刻無欠席が破られるが、どうでも良かった。成績は学年二位なので、遠慮はいらない。

山道を登り、県境を越えて自転車を只管に漕いで行く。体が悲鳴を上げているようであったが、無視して漕いだ。

四時間漕ぎ続けて、目的の場所に辿り着く頃には、汗が滝のように流れ、肉体的に限界が来ていた。

それでも体に鞭打って、人気の無い、荘厳な屋敷の扉に手を掛ける。

ここは、祖父の家だった。祖父は二年前に他界しており、ここは来年に取り潰そうと話が持ち上がっている。

祖父の葬式以来、誰もここに近付かなかった。その理由が、遺言だ。

『蒼に全てのものを託す。あいつが屋敷が欲しいというならくれてやって欲しい。道場と屋敷には蒼しか立ち入るな』

との事だった。

蒼も祖父の死後以来、訪れていなかった。ここに居ると思いつく祖父との思い出の数々が蘇り、落ち着かなくなるに違いなかったからだ。

都合上、ノスタルジックな気分になるのは拙かった。剣道は精神の乱れが命取りとなる。

が、もう剣道そんなこと剣術に固執しなくても良い。辞めるのだから。

ずっと手入れをされていなかった庭木などが鬱蒼と覆い繁る庭を通り、古びた扉を開ける。

いつも汗の臭いがした道場は、すっかり埃っぽい臭いに変わっていた。掃除もろくにされていなかったなので、歩いた後に足跡が残っている。凄い埃だ。

蒼は奥へ移動し、保管庫の扉を開ける。

そこは神聖な感じのする場所。普通の小部屋だが、辺りに満ちる通常とは違った気がそうさせているのか。

木刀などが立てかけられてある中、真剣が一振り遺されていた。

「……祖父さん」

抜刀してみると、曇りの無い流麗な刀身が露となる。この二年間放置されても、この刀は錆付きもしない。こういった力ラクリなのか。

道場に戻る。構え、緋炎流の基本形である居合いの型をこなし、鞘を使った二刀の型を行なう。更に八双へ型を変え、疲れるまで刀を振り続けた。

汗が滝のように流れ、もう動けなくなるまで振り続けた。

埃だらけの床へ仰向きに倒れる。それだけでかなりの埃が舞うが、払う気にもなれなかった。

呼吸を整えながらも、胸の熱さをとめられない。

「ごめん……祖父さん。俺、これ受け取れる資格があるのか……わかんないや」

目を片腕で覆い、嗚咽を漏らす。

誰もいない道場の中、すすり泣く声だけが虚しく木霊した。

夢だろうと、感覚的に理解した。

何か変化の予兆があると、こうして夢を見ている。

未来であったり、過去であったり。その内容は様々で、蒼にとってはあまり好ましくない事が多い。

しかし、今までの夢と、今日はどこか違っていた。

主観ではなく、第三者からの目線で、何となくだが『見せられている』といった感覚だった。

幼い頃の自分と、蒼の祖父が会話している光景が浮かんでくる。

その一言を聞いた途端、記憶も同時に蘇ってくる。

「ねえ、お祖父ちゃん。なんで剣を振るの？」

そう。それは素朴な疑問だった。

蒼自身、物心がついたときより竹刀を振るっていたので、考えも

しなかったことだが、突拍子も無く出てきた疑問だった。

祖父はその質問を無視し、道場奥にある真剣を持ってきて、それを抜いた。

「美しいじゃろう」

鈍い銀色。優美な刀身の妖しい輝きに吸い込まれそうだった。

純粹に美しく、圧倒的な何かがその刀にはあった。

「だが、これは人を殺すための道具じゃ。いくら美しかろうとも、その事は変わらん」

ゆつくりと刀を鞘に収め、こちらに手渡してくる。

——重い。重量的にもそうだが、それとは違う重さがある。

見透かしたような祖父の声が聞こえた。

「重いか。……それは、覚悟の重さじゃ。目的を達するために、その刀を振るえるかどうか。覚悟すれば、そんな重さなど消えてしまっ」

枯れ枝のような手が刀を蒼から奪い、祖父は優しい目でこちらを見る。

「そう遠く無い将来、己の運命を変える出来事が来るじゃろう。

今日よりお前に伝授する剣技も、それを乗り越えるために要る。綺羅星の長男として、同時に末裔として、お前はいつか、非日常への切符を手渡されるじゃろう」

わけがわからなかった。

「……最初の問に答えよう。剣を振るのは、己の道を切り拓く為じゃ。この剣で人を殺す事も守る事も、覚悟次第。その選択肢を増やすための、術なのじゃよ」

「??」

「今はわからんでいい。ただ、覚えておけ。後悔したくないのなら、その日が来るまで剣を振るい続ける。それだけじゃ」

蒼が始めて学校をサボった日から、一週間が経過した。

家に戻る気にもなれなかった蒼は、祖父の家に住む事にした。屋敷の方は築四年と新しかったので、掃除すれば設備は申し分無い。ついでに、学校も移る事に決めた。編入試験は軽くパスしたので、何の問題ない。制服も既に届いている。

この事については、両親も納得してくれた。未練を断ち切りたい、と言ったら、すんなり納得してくれた。学費や生活費諸々も用意してくれるようなので、感謝してもしきれない。

先程の夢は、多分ここに移ったからだろう。家で使っていたスプリングベッドではなく、ここでは布団を使っているからかもしれない。懐かしさが夢に出た、そんな具合か。

新人戦は五月に行なわれ、今は六月。梅雨真っ盛りである。

転校初日。雨に見舞われるだろうと予想はしていたが、都合よく今日一日だけ降る雨らしい。しかも、これが止んだら早めの梅雨明けとなるそうなので、ざあざあと降りしきっている雨がより一層、恨めしい。

「……別にいいんだけどな」

欲を言えば、少しでも晴れて欲しかった。この熱気と湿気が多い中、登校したくない。

ちなみに、庭は片付いていないが、屋敷と道場は綺麗になった。

近い内に庭も掃除する予定である。

屋敷を優先させた理由は、副収入源として部屋を貸し出したいと思っていたからだ。そうして、集まってきた人物に庭掃除も手伝われば良い。だっ広い庭を一人で掃除するのは、先ず気持ちが挫けてしまう。

玄関を出て施錠を施してから傘を差し、げんなりとした気分になりながらも、蒼は歩いていく。

通学路は覚えている。何度か、試験や書類提出等で向かった時に頭へ焼き付けたのだ。

山道を降りて、公園を右に曲がり、後は道なりに行けば辿り着け

る。

真新しい制服。それは黒のスラックスに白いカッターシャツと言った組み合わせで、シャツの胸ポケットには校章が刺繍されてある。何か、青い鳥を冠しているのは分かるのだが、複雑な紋様なのでよく分らない。

と、校舎が見えてくる。

良くも悪くも、その校舎は普通だ。白塗りの、オーソドックスな構造をしている、三階建ての建造物。

グラウンドも標準的な広さだろう。前の学校には無かった室内プールも建設されていて、体育系の部活動は活発そうだ。

特に、傍目から見える程に大きな道場からは、朝練だろう威勢の良い声が聞こえてくる。

それが酷く、蒼の精神を苛む。

激しく木の床を踏み鳴らす音、気迫の籠もった声、物々しく汗臭い胴衣と防具、ボロボロになるまで使い込まれた竹刀。

つい一ヶ月前まで、その場所にいた。

今ではまるで、ショーウィンドウの向こう側を眺めている感覚だ。まるで宝石のように道場を眺めている事に、蒼自身気付いていないが。

見えるものではない眩しさから蒼は目を逸らし、改めて校舎へと視線を向けた。

私立琴乃音学園。

ここが、今日から蒼が通う学校だ。

新しい何かを見つけよう。自分に縁の無かったものを始めてみる。気分を変えたい。

多少未練はあるが、そんな気持ちで溢れている。

何が良いだろうか。

青春をテーマに列挙してみる。

恋愛？

音楽？

創作？

運動？

喧嘩？

逃避行？

暴走行為？

——馬鹿馬鹿しい。

鼻で笑いながら一蹴し、現実を思い返す。

学力を上げて、将来良い所に就職する。学力の基盤を作っておく良い機会だ。幸い、ここは進学校。勉強しようと思えば、幾らでも教師は協力してくれるだろう。

——気持ちちは固まった。

「あの……」

そんな声が聞こえる。心配そうなニュアンスを含んだその声は、子どもっぽく、舌つ足らず。

朝、少し余裕を持ってきたので、周りには人が少ない。だから立ち止まっていたのだ。

まさか、初対面の人物に話しかけてくる奇特な人物がいるとは。世の中、分らないものである。

その奇特且つ稀有な奴の顔を拝む為に、振り返る。

が、その顔は愚か、姿までも無い。

どついう事だろう。幻聴でも聞こえる程、疲れているのか。

一応、左右は確認しておく。

右、誰もいない。

左、生徒が横切っているものの、こちらに話しかけてきた様子は無い。

——幻聴、か。

やはり、剣を棄てたのは大きいのかもしれない。しかしながら、これで食べていくには時代が悪過ぎる。将来、安心して過ごすには、剣はいらないのだ。

溜息を吐き、再度前を向く。

「あのっ！」

先程よりも強めの声。今度は聞き違わない。肉声だ。背後で聞こえる声に振り返るも、やはり誰もいない。

今度は視線を下方にずらす。どうやら正解だったようで、ブラチナブロンドの細く艶やかな髪が視界に入る。次いで、型の良い眉。大きな碧眼。小さな唇。日本人離れた容貌に拍車を掛ける、すべてとしていそうな白い肌。

今まで見た中では、とびつきりに可愛い子だ。流石に蒼も驚いてしまう。

だが、学校を間違えてはいないだろうか。

とてもじゃないが、高校生には見えない。ついでに、制服も着ていなかった。涼しげな白のシャツに膝元まである茶色のスカートを履いて、同色のベストをシャツの上に来ている。細い足には白のソックスと光沢のあるローファ。子供用のスーツのようで、何だかませた出で立ちである。

察するに、ここの生徒の中に兄やら姉やらがいて、忘れ物を届けに来た。そんなところだろう。

「大丈夫ですか？」

ハッキリとした発音。外国人独特の訛りが無い、日本人のものだ。国籍はこちら側らしい。

それにしても、この年で良く出来た少女だ。思わず、感心してしまふ。

極力、恐がらせないよう、優しく声を掛ける。

「ああ、大丈夫だよ？　ねえ、君さ。お姉ちゃんかお兄ちゃんに用なのかい？」

「へっ！？　あ、あの！　私は……！」

焦っている。多分、人見知りの激しい子なのだろう。

このまま会話を続けるのも忍びないので、さっさと打ち切る事に専念する。

「でも、ゴメンね。俺はここに編入……じゃ、わかんないかな？

転校してきたんだよ。あ、そうだ。職員室に行こう。あそこに行けばきっと大丈夫だよ」

有無を言わずに捲くし立ててしまふ。こうした方が手っ取り早い。

彼女の手を引き、蒼は彼女のペースを考慮しつつも急ぎ足で二階の職員室に向かう。

「だ、だから！ 私は……！」

「うん、ちょっと恥ずかしいね。でも大丈夫。家族の人を探すなら、俺よりもずっと確実だからさ」

少女は事あることに何か言いたそうだったが、言葉を紡いで相手を黙殺する。そこで彼女の顔色を見ていれば少し違ったかもしれないのだが、蒼は面倒事を片付けたくて頭が一杯だった。

正直、子どもは嫌いである。

手間が掛かる上、感情と行動が直結しやすく、浅慮で、考え無しに動き回り、主体性の欠片も無く、すぐに泣く。どこをどう好きになれと？

——一秒でも早く離れたい。

その思いを成就するべく、職員室のドアをノックし、開いた。

「失礼します」

そう言っただけに入る。

一番近くにいた、黒髪ロングの女性教師がこちらを見、怪訝そうな顔をする。

「誰だ、お前？」

長い黒髪は少々癖がある。品のある顔立ちをしており、スタイルも良く、美人だ。美人なのだが、身に纏っているスーツを着崩し、胸元を開けている姿は豪快の一言。極めつけに、煙草を啜えながらマグカップを口元に傾けていた。野性味溢れる美しさ、とても表現しておこう。きっとその方が良い。

「今日、編入予定の星名蒼です」

「そうか。あたしは近衛京子だ。……で、どうしたんだ？」

「えっと、実は……この子、この学校の生徒さんに用事があるそうで……」

と、そこで蒼は気が付いた。

黒髪の女教師——近衛先生の口の端が引き攣り、ピクピクと動いている事に。何かを堪えているようだ。

少女の方を見れば、頬を膨らませて近衛先生を睨んでいるではないか。どうやら、面識があるらしい。

「知り合いなら、良かったです。このお嬢ちゃんをお願いできますか？」

「ああ、いいぞ」

「よかった。人見知りが激しそうなので、正直困ってたんです」
何も変な事は言っていないはずなのだが、近衛先生の目尻までもが引き攣ってきている。もう、可笑しくて堪らないといった感じに、身体も小刻みに震えていた。笑う事ではないと思ったが、ここで口を出すのも躊躇われる。

そう思い、話を変える事にした。

「……で、俺の担任は誰ですか？　もしかして、近衛先生ですか？」

「喜べ、副担任は私だ。……担任、知りたいか？」

「ええ」

不意に、少女の手を握ってくる力が強まる。

「ああ、ゴメンね？　お嬢ちゃん、どうしたの？　おトイレに行きたくなった？」

途端、職員室が静まり返る。

「……………ぷっ」

そんな中、近衛先生がとうとう堪えきれず、

「ぎやははははははははははははははははッ！！　ひーっはははははははははッ！　あー、こりゃ、なんとも……く、ははははははははははははッ！！　は、腹痛え……ッ！！」

静寂を切り裂いて爆笑を響かせる。

不気味な程に静かだった職員室に、あまりにも場違いな品の無い笑い声は染み渡っていく。だが、彼女以外笑う者はいない。震えているところからして、全員堪えているようだ。

何とか笑いを押さえ込むようにして、近衛先生が続けた。

「くくく……。お、教えてやるよ。姫野・アイシアって言うんだ」

「外国の方ですか？」

「ああ。ぷつ、くくく……。でも、安心して良いぜ。何てったって日本語ペラペラだからな」

「そうなんですか！ それはさぞかし、勉強の出来る人なんですね！」

「そうだな。普通、綺麗なお姉さんを思い浮かべるよな？」

「え？ もしかして、相当年上ですかね？ ここに赴任して長いんですか？」

「いや、ピッチピチだ。今年で二年目になる。若いハーフのお姉さんだ。確か今年で二十四歳」

「へえ。君も、大きくなったらそんな風になれるよ。可愛いしね」

この一言で、職員室にいる大半の人物が笑いを堪えきれずに悶絶していた。が、彼らの表情を蒼は確認する事が出来ないでいる。

なぜなら、ようやく直感が回復し、全員が笑っていた理由を把握したからだ。

近衛先生が『どうしたんだ？』と聞いた時、視線は少女に向けられていた。

担任を知りたがっていた時に、少女の力が若干強まった。

——なんで気が付かなかったのだろう。

恐る恐る少女の顔を覗く。

——笑顔だった。

人生経験に何度も無い、恐怖を感じさせる、青筋が浮かんではいるが満面の笑み。

般若が恵比寿の面でもつけているような表情。自然と悟る。これは、拙過ぎる。

嗚呼、首をそちらに向けるのが嫌でたまらない。目を合わせるのが恐くて堪らない。しかし、そうしなければ余計に拙い事になる。

やはり恐々と、憤然とする上司のご機嫌を尋ねる平社員のように、蒼は尋ねてみる。

「……もしかしくなくても、姫野先生でいらつしたりします？」相当慣れていたはずの敬語まで狂ってしまうほどの恐怖。剣道でも、そんな事は一度も無かったのに。

その笑みを引き攣らせ、少女——いや、彼女はこちらに向けて手を振り上げた。

「そうですっ！！ あなたが所属する三組を受け持つてる姫野・アイシアですっ！！」

ジャンプしながらのビンタを喰らいながら、己の迂闊さを蒼は呪っていた。

そして、頬に小さな紅葉を作ったまま、教室に案内される事となったのであった。

A c t 1：曇天の少年、斜陽の少女 1 / 2（後書き）

この小説は、各ヒロインのルートを書いていこうと思います。それまで、気力が持つかどうかは謎ですが（オイ
鋭意、頑張ります。

先生方からは同情を頂けた。身に染みる程に余計なお世話ではあったが、そんな事はどうでもいい。

あからさまにむすつとした表情の姫野先生と、頬に紅葉を浮かべている蒼。一年三組全員の視線がこちらに集中するのを感じ、隣では更に不機嫌度十割増しの姫野先生がこちらを睨んでくる。居心地が悪いったらありやしない。

「……このクラスに、新しいお友達がやってきました。みなさん、仲良くお願いします」

刺々しい口調に胃痛を感じながらも、蒼は自己紹介を済ませる事にする。とにかく、一刻も早く席に座りたい。

「星名蒼です。少々事情がありまして、ここに編入してきました。よろしくお願いします」

高校生らしい挨拶だ。隙の無い、頬の紅葉さえなければ完璧であつただろう。

しかし、その紅葉がどうしても間抜けで、クラス全員から失笑を誘う。分かつてはいたが、これはかなりムカつく。

「空いている席に座ってください」

言う前に歩き出していた。好感度はマイナスなので、今更どうなるうが知った事ではない。

どっかりと腰を下ろし、机の上に鞆を乗せる。

窓際の席だ。一番後ろで、クラス全体を見回す事が出来る。左を向けば、すぐ近くの窓越しにグラウンドが見えた。雨は一時止んでいるが、雲の流れから察するに、夕方からもう一雨くるだろう。

右を見る。大柄な男子生徒がこちらを睨んでいた。

厳しい顔立ちに鋭い瞳。髪は短めに刈られている。筋骨隆々で、一言で表すならば、無骨。

中でも一番だと思う特徴は、鋭い瞳だ。白い部分が普通の人よりも

青白く、それが彼の周りから醸し出される『近付いたり話し掛けたりしたら殺す』オーラを助長していた。本気で凄まじたら、不良ま

で失禁してしまいそんな威圧感がある。

なので、そんな彼がこちらを向いた瞬間は少し驚いた。

「……五十嵐銀二だ。よろしく頼む」

予想通り、渋い声が飛んでくる。蒼は、笑ってそれに応えた。

「おう。って、そりゃこっちの台詞だよ」

「……………」

彼——銀二の眉が歪む。怒った……いや、不思議がつている。成る程、注意すればそれなりに表情が読めそうだ。

「俺が恐くないのか？」

やはり、渋く低いヴォイス。聞いただけで、お子様達が恐怖で物も言えない状態に陥る事必死だろう。

しかしながら、こういった相手も剣道で慣れていた。それに、人を外見で判断してはいけない。先程、ビンタを喰らった時に思い知った教訓その一である。

「別に。それより、ここに来たばっかだからさ。色々教えてくれると助かるんだが」

「……ああ。俺でよければ、引き受けよう」

そう笑ってくれた。笑みは凄惨なものだったが、気持ち伝わるので何の問題も無い。

と、その笑みを申し訳無さそうに歪め、しかし好奇心を瞳に覗かせながら訊ねてくる。

「……その頬はどうしたんだ？」

「恐らく、御察しの通りだよ」

「星名さん！ちゃんと『先生』の話を聞きなさい！！」

先生、のイントネーションの強さ。

全員が瞬間的に紅葉の訳を理解する。次いで、降り注ぐ同情の視線の数々。

小声で何人かが励ましてくれた。

（元気出せよ！ きっと、良い事あるって！）

（が、頑張つてね！ 先生も、分かってくれると思うし！）

（一ヶ月は続くと思うけど、めげるなよ！）

——正直、不安材料しか残らなかったが。

「——では、ホームルームを終わります。星名さん」

返事をせずに視線だけを向ける。頬を紅潮させ、今にも怒鳴りたそうな表情をしている姫野先生が、何かを堪えるように深呼吸し、改めて口を開く。

「今回のペナルティとして、しばらく雑用をお願いします。放課後、私のところまで来てください」

そう言い残し、ドアを破壊するような勢いで出て行ってしまった。ドアに申し訳ない。今度、痛んでないかチェックしておこう。

知らずの内に溜息が零れるが、そんなもので気分が晴れるわけでもない。切り替えてしまおう。

さっそく教科書を出そうとすると、それを銀二の野太い腕が制した。

「一、二限目は体育だ。三限は物理、四限目は数学」

「……二時間あるのか、体育」

「お前のところはどれくらいだったんだ？」

「週に二回、一時間ずつ。いや、この学校は良いな。やっぱこれぐらい無いと、張り合い無いもんな」

「……そうだな。今はバスケットをやっている。今日が終れば、次は武道に変わるが」

「チームって、俺も入れるのか？」

「俺の入っているチームが一人足りないからな。足を引っ張るなよ？」

「そっちこそ、その図体が邪魔にならない事を祈るぜ」
不敵な笑みを交わす。

明らかに口が悪いが、こちらが蒼の地である。礼儀作法を習ってきたとはいえ、四六時中力を入れてみると、流石に疲れてしまう。
本来なら、少々猫を被っておきたかったのだが、あの朝の騒動だ。

もう疲れてしまった。

ストレスも溜まったので、思う存分、発散させて頂く事にしよう。

何の因果だろう。

臨時の体育教師を、姫野先生が務めていたのだ。

やはりこちらを睨みながら、それでも授業を進めていく姫野先生。一方的にこちらが悪いのかどうかといえは微妙な所ではあるが、それにしたってこの嫌われようは凄まじいものがある。敵意をぶつけられるのは慣れているが、こんなに持続したのは久しぶりだ。

ストレッチから、腕立て腹筋背筋二十回、その後に広い体育館を二周し、バスケットボールをドリブルしながら更に一周。準備運動らしい。

「はい。では、チームに分かれてください！ えっと……星名さんは……」

「……俺のチームに入れます」

「あ、うん。お願いします」

恙無く、銀二のチームに所属することになった。

三対三のミニバスケット。隣では女子も同様の事を行なっている。

一試合をコート全面が男子。次に女子が全面を使う。交互に使うので、女子の動きが観察できると、銀二ではないもう一人の男子が、爽やかな笑みを浮かべていた。

「オレ、金丸祐一郎って言うんだ。趣味はゲームとか、漫画とか？

サッカー部なんで、よろしく！」

「おう。んで、バスケの方は得意なのか？」

「モチロン、苦手じゃないぜ。いやあ、女子に良い所見せるチャンスだからなあ！ 頑張っで行こうぜ、相棒達よ！」

友人が多そうなタイプだ。女子からは三枚目に見られがちな性格をもプラスに出来てしまいそうな、その爽やかな容姿と相俟って、親しみやすい雰囲気醸している。

ほんのり茶の掛かった癖のある髪に、柔らかい目。身長は三人の中で一番低いが、それでも普通より少し高めだ。

ちなみに、背が一番大きく、体格が良いのが銀二。しなやかで細身の外見の祐一郎。その中間が蒼といった具合である。

祐一郎はこちらの肩に腕を乗せて、顔を無遠慮に覗いてくる。不快でないのは、彼の人柄のおかげだろう。

「んでもさ、結構蒼もベビーフェイスだよな。今度一緒にナンパに行こうぜ？」

「残念だったな。俺、彼女いるから」

「うおっ！？ マジかよ！」

「脳内に」

「想像上かよ！ 虚しいだろ、それ！ 女体の神秘を知りたいとは思わないか？ なぁ、銀二」

「……コメントは控えよう」

「あれか、オレだけアウエーなのか！？ そうなのか！？」

「がつつき過ぎなんだよ」

「……確かにな」

「くっそー！ テメエら、後で『誰か紹介して』？ ——ってな事言っても、ぜってー無視するかな！」

「はいはい、成功してから聞きたいもんだ」

「……そうだな」

凄まじい勢いで親しくなっていく三人。

友人が出来たのは嬉しい誤算だった。これならこの三年間、退屈せずに済むかもしれない。

と、電子得点ボードに内蔵されているベルが鳴る。タイマーも完備されている、スポーツ大会でも使用されているポピュラーなタイプのものだ。しかし、真新しい。流石は私立である。

待ってました、と祐一郎が勢いをつけて立ち上がり、ゆっくりと、蒼と銀二が続く。

「よっし、ようやくオレらの番だぜ！ えっと、蒼って呼んで良い

よな？」

「おう。俺も祐一郎って呼ぶ。お前も銀二で良いだろ？」

「……構わない」

と、相手を見て、祐一郎は思いつきりげんりしていた。

平均百八十五センチの男達が、ボールを指の上で回したり、アップなのか小刻みに飛び跳ねている。余裕そうに笑い合う軽めの表情を見て、蒼は知らずの内に對抗意識を燃やし始めていた。体育系の性である。

「うげ。バスケ部じゃん。……勝てるかねえ」

「スポーツで負ける気は無いけどな。本職相手じゃ、微妙だが」

「……やれるだけやればいい」

そんな軽い気持ちで臨んだのだが、結果は……、

「お、お前ら……」

三十五対五。

圧倒的であつた。

そう。圧倒的、勝利であつた。

銀二の体格を生かしたディフェンスと、祐一郎の速攻。元はこの二人のチームなので、蒼はアシストに徹した。

ボールカットに専念すれば、少なくとも点を入れられる心配も無い。五点は、蒼と銀二がそれぞれミスをした数である。三十五点は、蒼と祐一郎が決めた得点だ。

可哀相なまでに息を切らしているバスケ部の一人が、蒼を見て首を傾げた。

「手加減、しろって……。てか、お前……バスケ部？」

「いや、違う。ちょっと昔にスポーツしてたただけだぞ」

「……息切らしてないし。何者だよ」

体力は少し落ちたものの、これくらいなら軽いものだ。疲れるという事は、無駄な動きが多いという事。

格闘技。

陸上競技。

球技。

スポーツにも様々な分類がある。

その中でも、集中力、判断力、スタミナは重視される。それを基礎と呼び、勿論、蒼も鍛えている。

各種目によって、別々に必要なものはある。それよりも重視されるのが、効率——どれだけ、無駄を省けるか。これに掛かっている。どこにどう集中すれば良いか、ここでどういう判断を下すのが適切か、余分な動きを除いてどれだけスタミナを持続できるか。

蒼は中学時代、徹底的に無駄を省く事に専念していた。

なので、引き締まった身体は、蒼の理想系になってくれた。

どんな状況でも、柔軟に力強く動ける筋肉。いざとなった時、咄嗟に動ける瞬発力。瞬間的にどう動くかを考える思考能力と動体視力。洗練された動きを無意識で行なえるこの身体は、何物にも変えがたい。

なので、再び感謝しなければならなだろう。

六月は湿気との戦いになる。気温も高いのが災いして、錆びやカビが目立つ季節。

細菌にとってはこの上ない楽園状態なのだろうが、人間としては不愉快な蒸し暑さであり、遠慮したいものである。

照明の金属の塗装を業者が怠っていた事を知っている者は、この学園で誰一人としていないだろう。塗りが荒く、そこから金属が年々錆びてきており、何の偶然かは知らないが、ヤケクソで誰かが放ったボールがその照明に直撃した。

今日の彼女は本当についていないと思う。きっと、十二星座占いとか、おみくじを引いたってアンラックな結果が出るに違いないだろう。

そんな姫野先生へ、一直線に照明が落ちる。

「っ！？ ……間に合え！」

一瞬で異音を聞き、バスケットボールを咄嗟に蹴り飛ばしたのは、祐一郎であった。同時に、蒼もバスケットゴールの位置を調節する

長い金属棒を手に、駆け出す。

凄まじい脚力にて放たれ、唸りを上げるボールは照明を掠り、一時それを跳ね上げる。しかし、すぐに重力の虜となった。

一般人が動けるようなシチュエーションではない。周りは唐突の事態に固まってしまったている。

その中を、蒼は八双に構えを取りながら走り、一番力が籠りやすい突きを繰り出し、照明にぶつける為のポイントを探る。

コンマ一秒の体感速度の中、ゆっくりと落下する照明と頭を覆う姫野先生。

——どこをどう突けば、あの照明を弾ける？

——簡単だ。

体が動いてくれる。一ヶ月の間があり、得物も違うが、これは剣術の感覚だ。

そう。剣道ではない。剣術の感覚。

立ち塞がる何かを断ち切り、穿つ為の術。

地面と棒が水平になるように、構えを変える。右足を前に出しながら、腰溜めに使っていた棒を繰り出した。

——ガギッ！

火花が散り、ガラスの破片が蒼へと降ってきた。刺さらなかったのは不幸中の幸い。

それにしても、凄まじい一撃である。

スピンしていた照明を、その一撃で完全に止めてしまった。威力も然る事ながら、電球のある部分に棒を突っ込んで動きを止めるという行為自体が神掛かっている。

蒼はゆっくりと照明を地面に下ろし、棒を手放す。

——手に痺れるような痛みが走る。流石に、無理をしたようだ。

表情には出さずに、何とか笑みを作って、驚いた顔をしてこちらを見ている姫野先生へ、手を差し伸べる。

「大丈夫ですか？」

「あ……うん。あり、がとう。星名さん」

手を借りて立ち上がると、なんだか潤んだ瞳でこちらを見上げてくる。碧眼と儂げな容姿と相俟って、妙な可愛らしさに溢れていた。

——苦手なのだ。その目は。

瞬間的に思考を巡らせ、自分の利にもなるアイデアを思いつく。

「これで、今朝のアレをチャラにしてくれると嬉しいんですけどね」そう。ジョークなのだ。ユーモアに富んだ従姉とはこういうやり取りが絶えなかったたので、通じるだろうと踏んでいた。

——何を間違ったのだろう。

潤んだ瞳が、その言葉を聴いた瞬間に、再び吊り上がる。とはいえ、先程よりは幾分殺気は緩和化されている。

あくまで、幾分だが。

「……放課後は忘れないで下さい」

こちらの腕に掴まりながら立つと、去り際にそう釘を刺された。

「……なあ、銀二」

「お前が悪い」

「祐一郎……」

「ご愁傷！」

何でだよ。

包帯がスルスルと巻かれていく。

細くしなやかな指が驚くほど丁寧に、蒼の締まった二の腕を白いヴェールで包み込む。湿布と細かい切り傷を覆った絆創膏を隠す為だ。「ったく。あたしの手を煩わせやがって……」

「すみません、近衛先生……」

「謝んなよ。体育館での出来事は全部聞いてるから。偉いぜ、お前。例え、私利私欲の為だとしても」

パン、と軽く腕を叩かれる。

普段豪快な仕草をしているから、先程の繊細な拳動に少し戸惑っていた。

気付いたか、肩を竦めてみせる。

「まあ、あたしが保険医つてのがありえねーよな」

「そう言えば、何で白衣を着ないんですか？」

「何か仕事してるなって感じがして、気持ち悪いんだよ。あ、コーヒー飲んでいくか？」

現在、放課後だ。昼休みぐらいに腕が痛み出し、拙いかと思いつつ放課後まで放置していると、銀二から強い語調で「診てもらいに行け」と言われた。素直にやってきてみれば、ただの打撲だ。一日寝れば気にならなくなる程度の。だが、放っておけば拙くなっていたと、近衛先生は言う。

芳ばしい香りが鼻腔を攪り、こちらの興味をそそのめるのだが、残念な事に約束がある。

「頂きたいのですが、残念ながらこれから雑用をこなさなければいけませんので」

「はあ……。お前もママだな」

席を立ち、ドアに手を掛けると、不意に何かが飛来してくる予感を覚え、振り向き様にその気配を掴む。……ガムだった。ピーチ味の。

「やるよ。蒼……だっけか？ 次はもう少し碎けて話せ。真面目ちゃんはおかん」

「……了解っス」

「そうそう、それで良いんだよ」

満足そうな近衛先生の声を聞きながら、保険室内の冷気を逃さぬよう、さつと廊下に出た。

湿っぽく暑い空気が蒼を容赦なく陰鬱な気分にさせてくる。纏わり付くかのようなこの不快感は拭えないもので、それが余計に苛立ちを誘発する。

さつさと片付けてしまおう。

——そして、副収入源として考案していた、『間借り』の張り紙を

張らねば。

職員室の扉を開け、目的の姫野先生を発見し、近くまで歩いていく。あからさまに歓迎していなさそうだ。ここまで態度が露骨だと、逆に清々しい。というより、冷房が心地よく、それだけで幸せである。「どーも。んで、何をやれば良いんですか？」

「……それ、持っていつてくれますか？ 図書室まで」

……また、これも凄まじい。

一抱えのダンボールが七つ。中身を見れば、辞書のような。悪意がひしひしと伝わってくるものの、二回に分けて運べば、苦ではない。四つを重ねて一気に抱え上げ、足で職員室のドアを開けつつ、持っていく。

「あ、あの！ 大丈夫なんですか!？」

「持たせた人が心配しないで下さいよ」

鼻で笑うように言い返してやる。何となくだが、勝利した気がした。

……何に勝ったのかは分からないが。

にしても、体の筋肉はそこまで衰えをみせてはいないようだ。少なくとも、握力は元の七十二にかなり近いはずである。

と、そんな事を考えながら歩いていたのがいけなかったのだろう。

「きや……っ!？」

「な——」

今日は蒼にとつても厄日らしい。

進行方向にいたのだらう誰かと衝突し、荷物を落としかけた。

しかし、ぶつかって来た衝撃から察するに相手は女性。詰まるところ、彼女に向かって辞書の山が降り注ぐ。

——流石に、それはダメだろう。

正面に倒れこむ。金属のパイプを掴んだ感覚はあるが、その感覚よりも背中への痛みに意識が行く。辞書の雨を一身に受ける事になろうとは。本日の雨と言い、よく降られる日だ。

反射的に目を瞑っていたらしい。目を開くと、長く、シルクのような銀色の髪。優しい香りがしたのは、錯覚ではない。

電動式だろう、中々高そうな車椅子に乗っている少女。紅い瞳はこちらを見て、驚きと申し訳無さが混ざったような顔をする。

「ご、ごめんなさい……！」

「いや、良いよ。前にも、車椅子の女の子を——」

——感じたのは、強烈な既視感。

そう。忘れるはずが無い。

軽率に飛び出し、無関係と思わしき猫を救出していた馬鹿。あのままでは、一人と一匹は仲良くご臨終していただろう。

その後、何の連絡もなく、ただ金が置かれてあっただけ。

——下らない奴を救った。こんな義理も無いような奴に剣を奪われた。

やり切れていなかった憤りと悔しさが急速に頭の中で沸騰していくのを感じる。

——落ち着け、飛び出したこちらの自業自得だろう。

その言葉を唱える事ができ、ようやく蒼は落ち着いたのだが、彼女の方はそうでもなかったらしい。

「わ、私を……助けてくれた、人……です、よね？」

「……そうだな」

「も、申し訳ありません！」

小さな頭を懸命に下げてる。

何度も、何度も。

機械的な動作ではない。一回一回、丁寧に謝罪の念をちゃんと込めて、謝ってくれている。

「私、お見舞いに行きたくて……でも、面会謝絶だつて言われて……」

……あの頃は状況に打ちひしがれていたから分からなかったが、面会謝絶だったのか。どうりで、人が来なかったわけだ。

内気そうな少女の瞳には、いつの間にもやたら大きな涙の粒が浮かび上がり、色素の薄い白い頬に、一粒、二粒と流れ行く。それが小さな流れとなるのに、そう掛からなかった。

「その後、あなたが優秀な剣道選手だったという事を知りました」

「誰に聞いたんだ？」

「調べて、もらったんです。ごめん、なさい……」

泣きじゃくりながらそう説明してくれる。

幸い、廊下に人気は無い。ここで姫野先生がいたら、また厄介な事になったのだろうが。

「……退院したって聞いて、お邪魔したんですけど……引越したって、言われて……っ！　ご、ごめんなさい！」

「あー……。謝るな」

「な、何ですか？」

「『俺が救う』。そのエゴを無理やり押し付けたんだ。悪いのは俺だろう」

翌々考えてみれば、その通りなのだ。彼女も迂闊だったのだが、それ以上に無理やり関わった蒼が悪いに決まっている。

——そう思い込まなければ、壊れてしまいそうだった。

彼女の悔恨の念と優しさに、怒りを衝突させるわけにはいかない。

人付き合いに然程興味が無い蒼にそう思わせる程に、彼女の存在は酷く夢げであつたからだ。

だが、彼女は優し過ぎた。

「で、では……私は、どうやって償えば……」

彼女の気持ちも分からないでもない。罪の意識は、心弱い人間を蝕み、脆くしていく。まるで、罪は白蟻、心は柱のようだ。

さて、白蟻を追い払うにはどうすれば良いか。

——黙考は一瞬。

「なあ、名前を聞いて良いか？」

「え？」

話題を変える。

情けない話だが、時間稼ぎであり、名前を知る事で互いの壁を薄くしていく、という打算的な行いだ。

それでも、充分過ぎる時間を齎してくれる。

淡い色をした唇から、小鳥のようにか細い声が發される前に、無駄を省いた台詞を構想していく。

「——リセ、です。リセ・E・フェルヴェノートと言います」

「見たところ、随分と身形が良いが……どこかの令嬢か？」

「え？ あ、その……はい。一応……」

「何でまた、こんな私立校に」

「え、えつと……お父様とこの学園長が知り合いなんです。救って頂いた日に、日本を案内してもらってたところで……。本当は、帰らなきゃいけないんですけど、謝らなきゃと思って……。お父様も、何かを取りに国へ戻ってしまわれて、今はホテルを借りています」

と、台詞を考えていた思考を破棄し、気になった事を訊ねてみる。

「金は？」

「えつと……その……」

「嘘は吐かないよな？」

「……もう、二日泊まれるかどうか……」

気まずそうに顔を逸らす彼女——リセ。

なら、好都合だ。

償いも、何もかも、これで解決する。どうやら、話を逸らしたのが功を奏したようだ。

「よし。俺の家に来い」

「ふえ……っ？」

間拔けな声と共に丸くなる瞳。素直な反応に好感が持てる。

「一ヶ月、五千元で八畳の部屋。昔の日本家屋ながら段差も無くスロープ完備。住人は俺だけだ。そこで頼みたいのが、花壇の手入れや植物の水遣り。期間は一ヶ月。これを贖罪としようか」

——蒼は、こういう性格だった。

自分に利があれば、初対面だろうがなんだろうが、それを追求する。合理的で、無駄の少ない選択を、感情介入を伏せながら行なえる。相手の心を見透かし、自身の心の干渉はシャットアウトする。饒舌

さも含め、将来詐欺師が似合いそうな男であった。

無論、恥じやプライド等はかなぐり捨ててゐる事ができる。取捨選択できる人間はネゴシエイトには強いのだが、この時は浅慮だったと言わざるをえないだろう。

第一に、リセが女性である事。

第二に、そこが『年頃の男子高校生が住む一軒家』——つまり、『一つ屋根の下』という、夢のような（男子にとつては、だが）シチュエーションとなる事だ。

この問題が相乗効果を生み、リセの頬を紅潮させる。元から肌が白いので、その紅は良く映えていた。

当然、感の良い蒼は失敗を悟る。

しかし、リセの方が早かった。

「や、やります！」

「は？」

その言葉に、頭が回らなくなる蒼。それはそうだろう。この選択肢を、絶対にリセが選ぶと思っていなかったのだから。

彼女を見れば、理由が一目で分かる。カテゴライズをするならば、彼女は『裏表の無い人間』であるに違いないからだ。

人間にはオーラというものがある。日本語に戻せば、『気配』。人柄を見る為に、一番手っ取り早く、根拠のあるものがこれだ。

彼女からは、『純粹さ』、『儚さ』、『優しさ』、『慈愛の心』、『思慮深さ』、『罪の意識』が見て取れた。

要するに、優し過ぎる少女。情緒的と精神面では幼さが残る。『純粹』の点については、まだ世間の汚さを知らないのだろう。浮世離れたお嬢様なのは、リセ本人の口からも聞かされた事だ。

だから、予想はできる範囲でも、選ぶとは思っていなかった。あまりにも突飛過ぎ、あまりにも内気な彼女には、この選択肢は茨の道である。

「……俺から厳命口調で喋ったのは何だが、断つても良いからな？」

分かっていった。聞かずとも、この少女の答えは――

「いえ、やります！ や、やらせてください！」

――イエス一択だ。

成る程、一度決めたらその意志が鈍る事は無い、といったところか。将来、苦勞しそうな性格をしている。

意志の弱そうな瞳からは、確かに決意の炎が見て取れた。

「こ、この程度で許されると思っていませんが……でもっ！ お願います！ やらせてください！ お金は要りません！」

「……日本語、上手いな」

「え？ ……えっと、日本人学校に通つてたり、してましたから……」

取り合えず、お茶を濁しては見たものの……自分で蒔いた種が急成長し実を付けたような状態に陥ってしまっており、ほんとと困り果てるしかない。

「ご両親に確認を取りたいのだが……連絡先を教えてくれるか？」

「あ、はい」

電話番号を蒼が差し出したメモ帳に記してくれる。丸っこく、蒼のものよりも幾分細い可愛らしい字で書かれた電話番号を携帯電話で打ち込み、通話状態に持ち込む。

「リセさん。君から取り次いでくれ。流石に見ず知らずの男が出たら怪し過ぎるだろう」

「えっと、お父様には、星名様の事もお伝えしてあります」

「……問題ないか」

そこで割り切るのが蒼である。実際、やり取りが面倒になっただけなのだが。

何度かのコール音が鼓膜を刺激する度に、初対面の人物と話す独特の緊張感を覚える。

『……Are you Japanese?』

「ああ」

鋭く、若い男の声がスピーカー越しに確認を取ってくる。

『……星名蒼か？』

「そうです。ご機嫌よう、初めまして」

『初めまして、通りすがりの社長さんです　本名はシャーナルド・K・フェルヴェノート。ちょび髭と甘いフェイスと鮮やかな金髪が自慢の三十二歳さ。で、何かな？　オジサン、何でも言う事聞いちやうよ？』

一気にイメージが崩壊した。もう少し、厳格な人物を想像していたのだが。

少し、悪乗りしたくなる。

「なら、お嬢さんを僕に下さい」

『うん、いいよ。って、ちょっとマテや。何だ、どういう状況！？』

「フッフ、実は御宅のお嬢さんを手籠めにしてしまってますねえ」

『な、なんだってーッ！？』

「……」

『……』

「……すいません、何だかやりたくなってしまったので」

『おう、そんなお前が大好きだぜ』

意味不明なやり取りだった。というか、初対面ではありえない、異常者のようなやり取りだった。

軽く自己嫌悪に陥りつつも、変人のシャーナルドと会話を続ける。

「で。本題を切り出したいのですが――」

『あー。リセをそのただだっ広い家に住ませる事には何も問題ないし、お前にならなくてやつても良いが、アレはお互いの了承を取ってからだぞ？』

「エスパーっスか、アンタ」

『社長ですから！』

「社長、随分と難しい職になりましたね！？」

『いや、俺的にはアレに突っ込んで欲しかったんだが……』

「何を言わせるっスか」

『ナニを言わせる？』

「ケツに指突つ込んで奥歯ガタガタ言わせんぞ、テメエ」

『地がヤクザ過ぎて恐いつて！……で、まだ何か？』

話が進まない。

だが、軌道を元に戻せそうだったので、核心に迫ってみる。

「……あんたの考えが分からん。可愛い可愛い愛娘だろう」

『うん、すつげえ可愛い。もうなんつーの？あのオドオドした感じがさ！ハニーの血が混じってるから、あの白い肌はとても美しいんだよ！そりや比喻表現でも何でもなく、目に入れても痛くないといつても過言ではないというか——』

「娘さんめつさ引いてるんだけど」

『孔明の罫ッ！？』

「……話を戻そう。事故から救った。それだけでそこまでさせるか？イマイチ、ピンとこないんだが」

自身が親ならば、男一人の家に愛娘を送り出したりはしない。しかも、素性は調べられているとはいえ、ほぼ初対面の相手だ。信用する方が間違っているし、信用するとなれば極度に警戒心が緩い愚かな輩だけだろうと思う。

だが、道化めいた印象を持つシャーナルドからは、そう言った愚かしさを微塵も感じない。

『ああ、それね。ハニーが、君の事気に入っちゃったみたいだから。俺としても、ウホッ、良い男！って感じだし』

「どんな妻だ……」

『あ、見たい！？ちよつと待ってくれ。君の住居に写真を送つてあげよう！それがいい！見麗しい女神のような女性だからね！』

「いや、遠慮しとくつス……」

『いやいや、遠慮する事は無いよ！私の部屋中にあるから、二番目に良い出来の物をあげよう！一番目は私だけしか見ちゃだめなんだ！二番目でも苦渋の決断だが、なんたつて未来のリセの婿だからね！あ、そうだ！近い内に、俺も行くからさ。剣術つてヤツを教えてよ！フルーレと刀なら、どっちが強いかってヤツ、や

つてみたかったんだ。あ、勿論真剣で。じゃね!」

「はあっ!? ちょ、待つ——」

プツッ。ツーツーツー……。

(……言いたい事だけ捲くし立てて、切りやがった!)

怒鳴りたい衝動を抑えながら、通話を切って携帯電話をズボンのポケットに放り込む。

リセを見れば、こちらを見てなんだか複雑な表情をしていた。

「……え、えっと。印象……違いますね」

「ここまでペースを乱されたことは無かったんだ。良い経験だった。良くも、悪くも」

溜息を吐いてから、蒼はバツの悪そうに顔を背けようとし——止めた。それでは、あまりにも無礼だ。

相手の目を見据える。真紅の瞳が、こちらの気配を察したのだろう。真摯な光を帯びて、こちらの眼光を受け止める。

「一ヶ月。それ以外は、君を拘束する事はないし、罪の意識も持たないでくれ。持たれると迷惑だ。ってなわけだな」

ポリポリと頬を搔く。少し照れくさい。こちらも一応、年頃の男子という存在らしい。まだ羞恥心が残っていた事自体、驚きではあるが。

「よろしく頼む、リセさん」

「は、はい! よろしく願います! 星名さん!」

「蒼で良い。苗字は嫌いなんだ」

「わ、分かりました。蒼……さん? 私の事は、そ、その……よ、呼び捨てに……」

「ああ。よろしくな、リセ」

その時、花のように可憐に笑うリセを見て、胸の奥が痛んだ。

——これは、罪悪感……なのだろう。

こんな少女に、何をさせているのだ。我ながら馬鹿馬鹿しい。

「あの……と、ところで……」

「何だ?」

「だ、ダンボール……」

「……おお」

雨は止んで、日は暮れていた。

姫野先生により怒られた事は、言うまでもないだろう。

「だ、大丈夫ですか？」

「……俺が、失念してただけだ。何の問題もない」

まさか、上り坂で車椅子を押しながらスポーツバッグを担ぎ、尚且つ数個の家具を背中に括りつけて帰宅する事になろうとは、夢にも思わなかった蒼である。

それはそうだ。

あのちびっ子教師に散々説教を喰らった後、高級ホテルのフロントからリセを迎えに行き、適当な調度品を半強制的に見立てて、ようやく帰路につけている。辺りには雲が失せ、煌々と輝く月と星々が闇の天蓋を埋め尽くしていた。

少し家具が背中からずれてきたので、背負い直す。

今日は何かと肉体に無理をさせているのだが、従順で屈強な肉体は、悲鳴すら上げない。

ブランク期間である一ヶ月。

——本当に、大した事は無いのか？

「んで、お前は何で学園にいた？」

「お、お父様から、この学園に入って良いよって言われて……。編入試験の帰りでした」

蒼は推測する。

律儀なりセの事だ。多分、学園を変えてまで謝りに来たのだろう。明らかに不便であろうその車椅子で、こちらを探す気で居たのだ。

その胆力は賞賛に値するが、ふとした疑問。

「そうか。……って事は、この一ヶ月間、学校も行かずにホテルで遊び呆けていたと？」

「ち、違います！ 勉強はしていました！」

「テストの方はどうだったんだ？」

「言っと、なんだかりセが強張ってしまった。心なしか、顔色が若干悪くなっているような気がする。」

「え、えっと……お、お父様のご容赦で、ギリギリ……お目溢しを……」

「馬鹿なのか」

「ふ、普通です！」

琴乃音学園は、偏差値五十九の進学校。頭は良い部類に入る。しかしながら……最近に試験を受けた身としては、相当楽な部類に分けることの出来る問題だと思ったのだが。

「まあ、何だ。勉強なら見てやる。心配するな」

「は、はい……。あ、それと……」

リセは申し訳無さそうに躊躇っている。何を今更とは思ったが、黙ってその先を促した。

「何だ？」

「えっと……もう、剣道はされないのですか？」

瞬間、血が沸騰したかのように滾る。

「何をいけしゃあしゃあと。」

「テメエが原因で辞めざるを得なくなっただろうが。」

「死にたいのか。つか、死ね。」

溢れる言葉を押し止め、自分に言い聞かせる。

「俺が迂闊だった。」

「他人なんて、助けた俺が馬鹿だった。」

「もう、知った事ではない。本当に必要な時には絶対、俺だけは動かない。」

——それで、いいだろ？——

「……ああ、ブランクもあるしな」
ちゃんと笑えていただろうか。

自分でも顔が強張ったのを感じている。だが、笑うしかない。
もう、笑うしかないのだ。

背中の荷物が、やけに重く感じた。

Act 2：剣道と新たな日常 1 / 2

蒼の朝は早い。

早朝四時半に起き、道場と庭を一通り掃除してしまう。ここまでが三十分。

リセにはさせられないので、庭を整える作業に一時間費やした。植物に水を撒こうと思ったが、昨日の雨を思い出して、止める。

朝六時。シャワーを浴び、学生服に着替え、朝食を作る。

出汁巻き卵、鮭の塩焼き、ホウレン草の御浸し、ワカメと豆腐の味噌汁といった純和風の朝食を作り終えて、ようやく六時半。

「リセー！ メシだー！」

返事が無い。

朝は弱くは無いと言っていたはずなのだが、どうしたのだろう。

部屋を仕切っている襖を、無造作に開け放つ。

「おい、メシー——」

——俺は馬鹿だった。

「ふえ……？」

薄いネグリジエ。可愛いショーツ。

最低限の布に包まれたその肢体は、女性的な曲線を描いている。陶磁器のような白い肌も、実際のそれとは打って変わって柔らかそうな質感に溢れていた。

少女らしい未発達なスタイル。しかしながら、要所要所の微かだが確かな膨らみが女性を感じさせてくれる。

彼女はきよとした大きな目でこちらを見ている。頬の色は最初こそ普通だったが、徐々に紅潮していく。それに応じて、目も見開いて——

「きゃああああああああああああああああああ——
——っ——」

——放心している場合ではなかった！

「す、すまん！」

手早く襖を閉める。

あんまりにも突拍子の無い事態に、蒼は混乱しかけていた。こんな出来事は、剣道馬鹿だった蒼にとっては未曾有の天災に等しい。

——大丈夫だ、落ち着け。

内心で落ち着く為に、目を閉じて深呼吸する。

しかし、目を閉じれば、網膜に焼き付いたあの映像が浮かび上がって——

（ぬああああああああああつ！！）

やはり、蒼も列記とした年頃の青少年である。

一人で襖越しに悶々としてしていると、その奥から声が掛かった。

「あの……」

「悪かった！ すまなかった！ ゴメンなさい！」

「いえ、良いんですけど……」

——いいのかよ。

「ちよつと、びっくりしちゃって……。大声出して、申し訳ありません」

「や、俺が悪かった。でも、返事くらいはしてくれよ」

「ゴメンなさい。寝惚けてて……」

衣擦れの音が襖越しに……。ああ、妄想やめい！ よし、三秒で忘れる。

三、

二、

一、

——もわわわわわん。

「ああもう、俺の馬鹿！ 俺の馬鹿！」

「だ、大丈夫ですか！？ 何かを打ち付けるような音が聞こえますけど！？」

気付けば、柱に頭をぶつけていた。何度も何度も……。いや、痛みになれていた所為か、大して痛くもないのだが。ちなみに、打撃は

ほとんど効かない。

心配してくれたらしく、すぐに襖が開かれる。紅いプリーツスカートに白いブレザーの制服を着たりセガ、四つん這いになりながらもこちらを覗き込んで来た。

「何やってるんですか!？」

「雑念を打ち消していたところだ。……待つてろ」

溜め息を吐きながら、彼女を抱える。流石に家の中まで車椅子を持ち出されては適わないので、こうやって抱えるか杖を突いてもらうか……なのだが、杖を突こうにも和室に捕まり立ちできる場所なんかない。

なので、こうやって抱えている。幸い、彼女は療養とりハビリも兼ねて日本に来たらしく、一ヶ月のうち、約半分程度は足の手術に消えたそうだ。

——彼女は、歩けないと知っていても、頑張っている。

——俺は、何をやっているんだ？

「あの……で、出来れば……移動しません、か？」

言われ、我に帰る。あらまあ、お姫様抱っこの真っ最中で。

「……俺の馬鹿! 俺の迂闊!」

「で、ですから!？ 何故、額を柱に!？ あ、ちよ!？ そんな抱っこしたままであわわわ!？ ゆれ、揺れます!？ な、何ですか!？」

聞いてくれるな、そんな事。

泣いていた。

端的だが、的確な事実を前にして、蒼はどうしようもなく、途方に暮れる。

——いや、だって……ねえ？

朝ごはんまで泣く人なんて、初めて見た。と言うよりも、リセは何故

泣いているのだろう。

嗚咽を堪えている彼女の顔を覗き込みながら、首を傾げる。

「いや、泣かれると反応に困るんだが……不味かったか？　鮭の骨が刺さったか？」

顔を俯け、首を横に振るリセ。じゃあ、何だというのだ。

しばらく待っている、ようやく彼女は顔を上げる。上気した頬と潤んだ瞳が、やけに色っぽい。

「お……」

「お？」

「美味しいんです……」

人騒がせな。

「アホか。こんくらい、ホテルでも出るだろ」

「いいえ！　ホテルは健康食しか出ませんでした！　良くて卵粥です！　病院にいた時も、こんなに美味しいご飯なんて出して下さいませんでしたし！　もう……もう、最高です！」

強く言い切るリセに何も言えず、白菜の浅漬けを齧る。

「イギリスの実家は紅茶しか取り得のない料理ばかりで、日本のご飯は美味しいって聞いていたものですから少し期待していたのに、めぐり合えなかったんです！　あ、この卵美味しいです！」

「出し巻き卵だ。そっちは鮭を塩で焼いたヤツで、隠し味だが七味をほんの少し振ってある。味噌汁はワカメと豆腐で、そのホウレン草はタイムバーゲンの安物だ。味付け次第なんだよ、卵粥だろうがオートミールポレッジだろうが、美味しいもん食ったら見方が変わるぞ」

「そうなんですか！？　あの味なんてロクに分からないオートミールまでもがですか！？」

そこまで言うか。と言うか、オートミールはアメリカの食物だぞ。何で食ってるんだよ。

ちなみに、蒼は良く食べていた。ミューズリーにして、プロテイン等を混ぜて朝に食べていた。……大量に買い過ぎて、グラノーラに

して菓子のように食べる日もあったか。もうしばらくは、食べたくない。

「あ、祖母がアメリカ人なんです」

「解説どうも」

「はうう……美味しいです……！ お箸の使い方を学んだ甲斐がありました！ このお茶も芳ばしくて美味しいです！」

玄米茶を飲みながらそう微笑むリセに、苦笑を返す。

テレビを点け、ニュースを眺めていく。今日も芸能人が結婚したやら、暇人が好みそうなニュースばかり。天気予報を見て消してしまおう。

『今日の降水確率は五十パーセント。ちなみに、降水確率って、雨が降る確率ではなく、地域の何パーセントに降るかと言う事らしいですよ？』

へえ。

まあどうでもいい。折り畳み傘を……いや、普通の傘で良いか。リセと帰るなら、傘は一本の方が何かと都合が良い。

『只今、速報が入りました。今朝、琴乃音市のアパートで火災が発生していた事件で、その火がようやく消し止められたとの事です』

「ここの辺りだな……。気をつけないと」

「ですね」

神妙な顔をして、テレビの電源を消す。リモコン操作は手馴れたものだ。

椅子から立ち上がり、杖を取ってやる。それを受け取り、リセもゆつくりと立ち上がった。

「鞆、俺が取ってきてやろうか？」

「いえ、これくらい。じゃないと、リハビリになりませんから」

「ああ。助けて欲しい時は、携帯に頼むか、大声でも上げてくれ。

駆けつける」

「何から何まで、すみません……。全部、私が悪いのに……」

しよげる彼女を見ていると、どうしようもなく腹が立つ。苛々して、

いつもの思考が何処かへ吹っ飛んでいくのだ。

もう何で怒っているのか理由も分からないが、気付けば口を開いていた。

「お前は悪くない。一々しよげ返るな、鬱陶しい！」

「す、すみません！ ごめんなさい！ 何で怒ってるのか分からないんですが、本当にごめんなさい！」

「謝るな！ 金輪際、謝罪は聞かん！ さっさと準備して来い、でないと坂の上からブレーキ壊した車椅子で滑走させるぞ！」

「ええええええええ——っ！？」

曇りと晴れの境を行く、朝六時の空模様。

今日も、騒がしい一日になりそうだった。

この学園には、名物教師が三人いる。

一人は姫野先生。その小学生にも迫る若さから、ちよいとマニアな人達に人気らしい。

一人は近衛先生。大人の魅力溢れるそのナイスバディと竹を割ったような性格から、引っ込み思案な女生徒と男子生徒の人気を独占。そして、もう一人。

「るるるーららー」 るるーるるるー」

適当な、しかし不思議と耳に残るメロディライン。

可憐で小柄な体躯は、ジャージに覆われている。その華奢な後姿は、どこか守ってあげたくなる。けれども、浮かべている笑顔は優しさと母性に満ち溢れていて、それが年上だと思わせてくれる。

校庭の片隅。武道館の隣にある……小さな花壇。

「らんらーららー……うん、よし」

小さくて白い軍手は、土塗れ。昨日の雨で、すっかりぐちゃぐちゃになっている花壇に、新しい種を植えたのだ。

名前が分かるように、木製の札を地面に刺す。『茄子』とある。

手の甲で汗を拭いながら、花のように笑った。そこいらの学生より

も若くて、可憐な笑顔だった。

「みなさん、最近練習に出てくれませんし……はあ」

その溜め息は、梅雨独特の湿った風に掻き消され、飛んでいった。

学園に来るなり、覚悟していたが視線が殺到する。

車椅子を急な坂で押して上がってくる見覚えのないヤツ。しかも、息は一つも乱れていない。

その車椅子に座っている子は美少女で、もう……注目されない方がおかしいと言うか。

「……あ、あの」

「いい、何も言うな。覚悟していた。分かりきっていた事だ……」

ああ、握り締めた車椅子の取っ手がミシミシと嫌な音を立てている。耐えてくれ、椅子よ。俺の自制心の為に。

と、そこへ軽い調子で声を掛けてくる爽やかな男が一人。祐一郎だ。「あれま、どしたんだ？ リセさんの車椅子、まさかお前が押してくるなんて」

「ああ、少し親しいんだ。親が知り合いでね」

「え？ そうなんで……むぐぐっ!？」

「と、とご覧のように、こんなスキップまで出来る仲なんだ。邪推は止してくれよ?」

「そりゃ良いけどさ」

「ん？」

「そのリセさん、そろそろ顔色が変わってきてるぜ?」

「……わああ」

手を離してやると、酸素が何よりの馳走だとも言つように呼吸を繰り返すリセ。

そんな彼女を他所に、会話を続ける。

「にしてもさ、今日も体育だろ? 何だっけ……」

「おう、柔道と剣道。お前さんは……剣道だろうな」

「拒否権なしだよ！」

「いやオレが決めたんじゃない。そもそも、何か臭いがあるイメージするんだよね、剣道」

「胸衣も臭いだろ」

「アホか。柔道部でもない限り、みんな新しいの買ってるっつ」

「暑苦しいし」

「あの物々しくて汗の染み込んでそうな防具よりや、何ぼかマシだよ。……お前、妙に剣道に肩入れするんだな。好きなん？」

「……まさか」

こちらの雰囲気でも気取ったか、祐一郎は肩を竦めて、車椅子の主導権を奪った。

「んじゃ、リセさんは教室まで連れてくよ。お前とは教室、正反対だしな」

「ああ。リセさん、放課後にまた」

「は、はい！　ありがとう御座います、蒼さん！」

手を振られながら、その場を去っていく。

どうしても……教室へ行く気になれず、校舎の裏側まで歩いていく。今の自分は、きっと酷い顔をしているから。

棄ててしまった。もう未練はない。

その、はずなのに……なんで、こんなに悔しい？　剣道なんか、好きじゃなかっただろ？

「あの……」

小さな頃からそれしか知らなかったただけだろ。他のスポーツだって良いじゃないか。一生懸命やってた自分が馬鹿だったんだ。それで

……良かったんだ。

「大丈夫……ですか？」

——本当に、良かったのか？

「……クソッ！」「ひうつ！？」

思わず、壁を殴りつけてしまう。

鈍い音が、結構な音量で響いていく。それが逆に、気持ちを落ち着

かせてくれた。

「剣道なんて……」

「ふ、ふえ……つく……」

「……ん？」

誰もいないかと思っていたら、何か細かい声が聞こえる。

振り返ると、ジャージ姿の女生徒が（多分、女子だろう）、尻餅をついて泣いていらっしやる。……あれ？ 何で！？

「ちょ、え……？ き、君。何で泣いて……」

「ご、ごごごごめんなさい！ 新任教師の癖にでしゃばっちゃつて、本当にごめんなさい！」

——またか！ また教師か！ 何なんだ、もう！ 恨みでもあのか！ 超優等生だぞ、俺！ つか、ここの教師若過ぎだろ！ 様々な言葉が脳裏を飛び交うが、やる事是一つ。

「……立てますか？」

スツと、手を差し出す。

何故か彼女はその手とこちらの顔を交互に見つめ、結局その手を取った。白くて、小さくて、ぷにぷにしている。

「すみません。多分、急に壁を殴ってしまつて、驚かれましたよね。先生の存在に気付かず……すみません」

「い、いえ。勝手に驚いたこちらの方こそ……」

どちらからともなく手を離し、妙な空気を堪能する。何故だろう、この空気は昨日からよく味わえてしまふ。美味しくないと言つのに。

「剣道……」

「あ？」

「剣道、お嫌いなんですか……？」

そつ、青い瞳で真つ直ぐに見上げられる。無垢だが、それ故に全てを見通すような透明な輝きを内包していて、居心地が悪くなった。何と言つか……もう、嘘を吐きたくなかったのだ。

「……正直、分からないんです」

「はぁ……。ですが、大丈夫ですよ？ 今年は私がバッチリ消臭も

しておきましたし、剣道の授業が嫌でも、きっと楽しくできるように頑張りましたから！」

——ああ、授業が嫌だっと思われているのか。
苦笑しながら、蒼はその場を立ち去る。

「……別に、授業とは関係ありませんので。ただの私怨ですよ」
「え……」

ここまで話す必要は無かったのだが、何となく……誰かに、聞いて欲しかったのかもしれない。

本日の体育は五、六時間目に行われる。

昼休み。蒼は学食で座れる席を探していた。手にはトレイ。トレイには、湯気を立てるうどんとミニカツ丼のセットが乗っている。

と、何故か隅のほうに座られてない席を発見。そこに座る。

斜め前に座っている顔の良い男がこちらを見て、立ち上がる。トレイにはまだ、食べ物が残っていた。

「なあ、何で移動するんだ？ 俺が何かしたんなら退くけど、そうじゃないだろ。一緒に食おう」

「……いいのか？」

「良いも何も、座った途端、目の前で逃げられたら胸糞悪いだろ」
「まあ、良いなら構わん」

長めの髪に、鋭い瞳。笑えばかなりのイケメンだろうが、その顔は怖い。体格も良いし、銀二とは違う、鋭い怖さだ。

「名前は？」

「……俺と仲良くするのは、止めておけ」

「そんなの、こっちが決める事だしな」

うどんを嚙りながら喋っていく。

話をするに、そんな悪い人物には感じられない。確かに無愛想だが、それを自覚しているようだし、自分についての扱いについても甘ん

じているようだ。狭量な不良連中とは、格が違う。ロンリーウルフか。

沈黙に耐え切れなかったか、それとも妥協したか。彼はステーキ丼を食べていた箸を休め、水を呷る。

「……本郷。本郷啓二だ」

「俺は星名蒼。一年」

「俺も一年だ。……ああ、お前、転校生か」

前情報を知っていれば、蒼も多分近寄ってはいなかっただろう。そう判断したに違いない。

はぐらかすのも馬鹿らしいので、素直に頷いておく。

「そうだ。……この学食、美味いなあ。公立校と比べ物にならん」

「ここは金を使う専門家が運営してる。使いどころを分かってるんだろう」

溜め息を吐きながら、本郷はそう言う。彼の言い方だと知り合いに聞こえるのだが、気のせいだろう。

「へえ。……あんだ、部活は？」

「剣道部だ。今は自然消滅しているがな」

「……？」

「薙刀部が道場を横領してる。人数が多いのと、主将が全国大会レベルなのが災いしてな」

「あんたら、部員は？」

「俺の他は……やる気なくて実力ある先輩が一人、中途半端な実力の一年が二人だ。それなりだが、そこそこやれる。新人戦では地区大会止まりだが……」

「どこで練習してるんだ？」

「グラウンド。最近は雨続きで、休み続き」

「そりゃご愁傷。筋トレは？」

「各種二百、素振りは七百。あくまで、俺個人だがな」

結構な練習量だ。それだけの努力を重ねて、何を彼は求めているのだろう。

「……実戦は？」

「あの新人戦すらも出れず、ここに来てからは一回も出来てない。

……向こうの顧問はいないに等しいが、部長が全権力を握っている。何でも、由緒正しい薙刀道場の娘だとか。学園長の親戚らしくて……」

横暴だ。そんな屑野郎に遠慮なんていらぬ。実力で潰し、捻じ伏せてやれば良い。

「潰せば？」

「試合じゃ……多分、無理だ。そいつ一人のワンマンチームだと思われがちなんだが、いかんせん、他もそこそこ強い。それに、審判は向こう寄りで、薙刀は有効部位が多い。リーチも違う」

「剣道部の顧問は何も言わないのか？」

「無理だ。先輩は裏工作が得意なんだが、先生に止められて、何も出来ない。……生徒を平等に見る事と実績を見る事、その板ばさみになって、何もいえないでいる」

「……それでいいのか？」

「良くない。……いずれ、正式に奪い返す。って、何で赤の他人に言っちゃったんだろうな」

食べ終えていたトレイを奪われ、蒼は瞠目しながら本郷を見る。

彼は、笑っていた。

「じゃあな。俺はいつもここで飯食ってる」

「ああ、また俺の席、キープしといてくれ。トレイ、サンキュ」

「……ヘンなヤツだな」

苦笑され、去っていく本郷の背中……使命感に満ちていた。

まるで昔の自分を見ているようで、蒼は少し感慨深く、同時に切なさを感じている。

それを振り切るように立ち上がって、次の授業の準備をしに教室まで急いだ。

本当は柔道か剣道かの選択が出来る授業だったのだが、柔道の人数が過半数を占めた為に、十数人しか剣道場にはいなかった。

「お前も剣道だったのか……」

「また会ったな」

本郷と出会い、笑いあう。

祐一郎や銀二は柔道らしく、別館の道場にいる。他の連中は明らかに柔道枠を取り損ねた細い人物の集まりで、自分達二人だけが場違いに感じる。

互いを見、それぞれ筋肉の付き方で驚いた。

「へえ……。制服着てるときは分かんなかったけど、結構ガタイ良いんだな」

本郷は背も高い。その眼光も相俟って、男には不良、女子からは遅く凛々しい存在として一目置かれてっていると、これは祐一郎の談だ。帰る途中、本郷について訊いた成果である。

その筋肉も屈強で、腹筋もかなり割れていそうだ。余程訓練をつまなければ、こうはならない。

「お前も、細身かと思えば無駄のない筋肉をしてるな。何かやってたのか？」

「まあ、少しな」

答えを濁しつつ、正座をして教師を待つ。

時間よりも少し早く、教師が到着した。今朝方見た、あのジャージの女性である。

「み、みなさん、お待たせしました！ では、早速始めましょう」
走ってきたのか、多少息が上がっている。

桜色の髪を靡かせ、可愛い顔には笑顔。白い肌が眩しい、同年代にしか見えない女性だ。

「豊崎先生だ、ラッキー！ 鬼吉じゃなくて良かった〜！」
「だよなあ……。まあ、剣道でも良いかあ」

のんびりとした笑顔を浮かべる男子一同。それで良いのかと問いた

くなつたが、まあ所詮授業。武道精神を学ぶ事に重きを置いたものなのだろうし、肉体的しごきがない分、喜ぶべきなのか。

と、こちらに近付いてくる豊崎先生。ああ、多分剣道部の本郷に協力を仰ぐのだろう。日本手ぬぐいを頭に巻くのだって、初めてのヤツならば迷うに決まっている。指導する人間がマンツーマンの方が、何かと都合が良いのだ。

律儀にも覚えていたのだろう、豊崎先生は申し訳無さそうな表情をしてこちらへと頭を下げてくる。

「あ……今朝は、失礼しました」

「いえ……」

何かあったのかと本郷が目で訊いて来るが、片目を瞑って答える。少しな、と。

アイコンタクトに気付いていないのか、豊崎先生は当初の目的らしい事を本郷に話す。

「本郷さん、ご指導に協力してくださいませんか？」

「先生、俺はこいつを教えるんで」

「いや、いい。防具や手ぬぐいの付け方は予習してきてある。俺の事はいいぞ」

初心者コースは……流石に苛々しそうなのでご遠慮しておきたい。だが、豊崎先生は首を横に振ってきた。

「いけません。本で見ると、ずっと難しいんですよ？」

「ほら、手ぬぐい」

「サンキュ」

先生を無視するような形でそれを受け取り、さっさと巻いてみせる。

「防具は？」

「ああ」

垂れを付け、胴を結ぶ。面を結ぶ前に、神前に礼をする。それから面を被り、しっかりと結んだ。これで完成。

「本を見れば誰だってわかりますよ」

何か言われる前にそう言っておく。

怪訝そうな顔をしていたが、両者納得したようだった。特に、豊崎先生はとても嬉しそうな顔をしている。

「この授業に、そんな積極的になって頂けるなんて……！ 私も頑張って指導しますから！」

見当違いな意気込みに、面の中で苦笑する。

道場の端により、胡坐を掻きながら他の連中が防具の付け方をマスタ―するまで待つ。

三十分は防具の付け方について学び、残りの五分で装着のテスト。全員が一応合格し、今度は竹刀の持ち方、基本的な動作についての説明。眠い。

手首を中心に準備運動を行い、籠手をつける。それから、全員に竹刀が配布された。

まずは真っ直ぐに剣を振れるように。それが出来たら、今度はすり足の練習。前へ、前へ、後ろへ、後ろへ、右、左、右右、左左。

それが出来たら、今度はすり足と剣を連動させるように動く。掛け声もそこそこに、今度は打突の練習。

基本的な掛け声と面打ち、残心。相手は豊崎先生では身長差がありすぎるので、何故か選ばれた俺と本郷が模範演技をする。ちなみに、豊崎先生はジャージだ。手ぬぐいを頭に巻いてはいるが。

一足刀の間合いから、踏み込み、相手の面を打つ。踏み込み足は地面を揺らすかのように力強く、掛け声は相手を怯ませるかの如く大きく。成る程、本郷は技量が足りていないようだ。打突時に多少の予備動作が出ている。もう少しコンパクトに竹刀を振れば、彼は化けるだろう。

そんな事を思いながら、胴、籠手の練習を行っていく。派生の籠手面打ち、引き胴もやるが、突きは危険らしく教わらなかった。賢明だ。

そうしていると、道場に女生徒がぞろぞろと入ってくる。薙刀を所持しているところから見ると、授業なのだろう。

豊崎先生が真っ先に走りより、声を荒げる。

「今は授業中ですよ！ 何しに来たんですか？」

「剣道なんかに道場を使われたくないんですよ。薙刀を指導するのに、ここを譲ってもらえませんか？」

舐め腐った言葉だ。高圧的だが、目付きの悪い少女は部長ではないだろう。明らかに後ろ盾を得ている小物の顔だ。それらが二人。

むかつ腹が立つが、自分には関係ない。そもそも、出て行つてどうにかなる問題ではない。

それに、俺よりも煮え湯を飲まされているヤツが、怒っていないわけがないのだ。

「デメエら……！」

本郷が立ち上がると、豊崎先生は立ちふさがってくる。何故だ？

「暴力はいけません！」

「そうそう、試合でもすれば良いんじゃない？ 勿論、二人で」

普通は三人だが、有級者が二人程度しかいないのだろう。やはり小物顔の二人がそうなのか。

防具越しに伝わってくる、悔しそうな本郷の念。豊崎先生も悲しそうに俯いている。

流石に——これ以上は、抑えられなかった。

「——いいよ、やろうか」

立ち上がりながら、入り口に屯している二人へと話しかける。

さも可笑しように、彼女たちは笑っていた。

「何それ、あんたあたし等に敵うと思つてんの？ あたしらレギュラーよ、レギュラー。今日打突とかを習ったばかりのおのぼりさんが、勝てるわけないでしょバーカ！」

下品に笑う女子たちを、踏み込み足の音で黙らせる。

「……試合だろ？ さつさと準備しろよ。お前らブス二人の相手なんて、俺一人でもいいんだぜ？」

その挑発に、彼女らの表情が凶悪に変わる。

ルールはこうなった。時間無制限の一本勝負、総当り（とは言っても、二人だけだが）。一勝一敗なら、勝者同士で再び当たる。

有効打突は各々の武器に依存する。つまり、剣道は剣道の、薙刀は薙刀の有効部位に打突を浴びせればOK。これは部位が少ない剣道が不利だ。薙刀連中に煮え湯を飲まされてきた一因でもあるだろう。豊崎先生は、カメラか何かを持っている。横暴を露呈するには、確かに有効だ。

先方は本郷。少しでも自分の動きを見て、吸収して欲しいとの願いだった。

審判は豊崎先生。レンズ越しにこっちが見えるのやら。

「……始めッ！」

「ラアアアアアアアアアア——ッ——ッ——ッ！」

「はああああああああ——ッ——ッ——ッ！」

伊達にレギュラーではないらしく、速攻を仕掛けた本郷の竹刀を弾く。残心の直後に攻めてくる辺り、薙刀に紳士的な連中ではないらしい。

が、体格が違いすぎるのが仇となった。

「なッ——」

女生徒が足払いを使ったのだ。無論、審判は見ているが、インカム越し。多分、声を上げる暇すらない。

その隙を突いて、胴へと竹の穂先を打ち込んだ。

「胴お——ッ——ッ——ッ！」

「胴あり！ 薙刀！」

分かりやすい。……が、まあ両者動きに無駄がありすぎる。礼をし、戻ってきた本郷は、悔しそうに肩を震わせていた。

「……すまん」

「いいよ。あの程度なら、五秒もいらなない」

「何？」

怪訝そうな声を背に聞き、前へ。

「ねえ、あんた。後で覚えときな」

「……」

「あ？ 今更ビビってんの？ ねえ」

無視しながら、試合開始の合図を待つ。

舌を打つ目の前の無礼極まりない女が許せない。幾戦もの戦いを見届けた神前で、こんな暴拳に出る恥知らずに——思い知らせてやるう。

「——始め！」

「や——」

——遅い！

「せええええええええええ——ッ！」

打突を放とうとした瞬間に、こちらの面が決まる。

容赦ない踏み込みをした。床板が低い音を立てて一瞬沈み込むほどに。だが、懸念していた右足は痛みも何も感じない。いつものように、衝撃が骨へと伸びていくだけ。

「め……面あり、剣道！」

素人さが可愛い審判の声と自分のブランクがそこまでなかった事に、苦笑する。

ロクに受け流しも出来なかった所為で、強力な打撃となっただろう。女生徒のうめき声が聞こえるが、起き上がるのにしばらく掛かるはずだ。

そこに居た全員が、沸いた。自分だってそうだ、目の前で自分よりも遙か高みにいる連中の技を見れば、誰だって心奪われる。

複数の女生徒がそのレギュラーとやらを引き摺って行き、次に本郷とやった女生徒が蹲踞をする。

もう油断はしてこないだろう。ならば、軽く捻じ伏せてやるまで。

「——始め！」

やはり、距離を取ってきた。

だが——やっぱり甘い。もう既に、飛び込んでいる。

「しゃああああああああ——ッ！」

抜き胴。残心も無駄なく決め、判定は——

「胴あり！ 勝者、剣道！」

——全員、五秒も持たなかった。

その事実を目の当たりにし、女子連中はそそくさと退散していく。
良い気味だ。

往生際が悪いのか、その胸を決められた女生徒はこちらを指差して
叫んでくる。

「アンタ、素人じゃなかったのかよ！」

「お前はそれを戦う前に知っていた。その機会があった。それでも
負けたんだ。それに、薙刀つてのは人を侮る武術だったのか？ 武
術の心を忘れたなら、段位を持つとうが武道家ではない！ 武道を汚
すな！ 面汚しが！」

「じゃあアンタは武人なのかよ！」

蹲踞のまま、刀を収めるモーシヨン。凜と響く声で、言つてやる。

「そうだ、お前さんがたに言つといてくれ。俺がお前らを潰しに行
くつて」

質問には答えず、そう返す。

悔しそうに舌打ちし、その場を去っていく女生徒。

駆け寄ってくる人々を見て、蒼は何故だか心温かくなる。

——やっぱり道場が自分の居場所だと、心が呟いているかのように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0103t/>

曇天の少年、斜陽の少女 ~ It's Like A Pot of Gold At The End of The Rainbow

2011年10月7日20時43分発行